

学位論文要旨

学習者の思考過程に着目した 国語科論理的思考力育成の研究

広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
学習開発専攻カリキュラム開発分野

幸坂 健太郎

2014

■論文構成■

序章	課題設定・目的・方法
第1章	「論理」・「論理的思考」概念を整理する観点
第2章	これまでの「論理」・「論理的思考」概念の調査と考察
第3章	目標・内容
第4章	学習者の論理的思考の過程に着目する必要性 ——説明的文章の読みを領域として——
第5章	認知カウンセリングの検討
第6章	学習者の思考過程に着目した先駆的な一斉指導理論の検討
第7章	学習者の思考過程に着目した国語科論理的思考力育成指導の提案
第8章	実践のデザインのための基礎理論
第9章	実践1——ペア学習を組んだ実践的研究——
第10章	実践2——“発表会”を組んだ実践的研究——
終章	成果・課題
	参考引用文献
	巻末資料
	謝辞

■課題設定・目的■

これまで国語科教育では、指導の重要な柱として、論理的思考力の育成が掲げられてきた。しかし、国語科における論理的思考力育成においては、その目標・内容について、また方法について、未だに以下の課題が残されていると考える。

目標・内容に関する課題

国語科では、「論理」・「論理的思考」概念が統一されているとはいいがたい状況にある。そのため、論理的思考力育成といった場合に、何を目標にして、どのような内容を指導しているのかが曖昧になっているという課題がある。このような状況では、国語科教育全体において、論理的思考力育成のための理論やその理論に基づく実践がさまざまに提案されたとしても、それらを相互に比較し、さらに発展させていくことが難しくなる。この状況を乗り越えるには、それぞれの論理的思考力育成のための理論・実践が、どのような「論理」・「論理的思考」概念の上に立脚しているかを明確にし、それを踏まえた上で、国語科論理的思考力育成においてどのような目標・内容を定めるべきかを明らかにする必要がある。確かに、これまでも本研究と同じ問題意識を持つ研究はあった。それは、国語科教育における「論理」・「論理的思考」概念を構造化・体系化し、整理を試みる論考（以下、概念整理論考）である。しかし、概念整理論考の間でも「論理」・「論理的思考」概念を整理するレベルが異なっており、個々の論考では国語科教育における「論理」・「論理的思考」概念の全体像は把握できない。

方法に関する課題

方法に関する課題は、学習者の論理的思考の過程に着目した指導方法の検討が十分でない点である。これまでも、多くの論理的思考力育成方法が研究されてきた。しかし、それらの多くは、教師がどのように授業を組み立てて論理的思考を学習者に行わせる活動を設定するかという、指導者の側の手立てを構想する方向を目指すものであった。一方、学習者が論理をどのように受け取り、またそこでどのような論理的思考を働かせているのかという学習者の思考過程の側面に着目した指導方法を構想する方向も考えられる。こちらの方向を目指す研究は、十分になされてこなかったのではないか。長崎他（2003）は「学習者の思考過程が見える実践が、これまでの国語科には皆無だった」としているが（p.1）、これは論理的思考力育成にもあてはまる指摘である。

以上の課題設定を受け、本研究は以下の4点を目的とする。

- ①国語科教育で扱われてきた「論理」・「論理的思考」概念を総合的・統一的に整理するための観点を提案し、それをを用いて国語科教育全体における「論理」・「論理的思考」概念を調査・整理する。
- ②①を踏まえて、国語科における論理的思考力育成の目標・内容を明らかにする。
- ③学習者の論理的思考の過程に着目する必要性があるということを、国語科論理的思考力育成（特に説明的文章の読みを領域とする）の原理として位置づけ、その原理にしたがった具体的な方法を提案する。
- ④小学校段階で③で提案した方法を用いた指導の具体を示し、有効性を検証する。

■本研究の成果・各章の概要■

以下、上で述べた4つの目的をどのように達成したかを論じる。なお、各目的を達成するための論述が本論文のどの章に当たるかも示す。

目的①：「論理」・「論理的思考」概念の整理・記述

まず第1章では、国語科教育における「論理」・「論理的思考」概念を整理するための観点としてPLTという基準を設定した。このPLTは、恣意的な基準ではなく、従来整理されてきた観点をさらにメタ整理することで得たものである。

そして第2章では、その基準をもとに、2000～2011年までの国語科教育関連雑誌に掲載された論考において「論理」・「論理的思考」概念がどのように捉えられているのかを調査・記述した。この調査から、次の2つの課題を導き出した。すなわち、多様に捉えられてきた「論理」・「論理的思考」概念を踏まえ、どのように国語科論理的思考力育成における目標・内容を定めていけばよいかという課題と、学習者の思考過程に着目した国語科論理的思考力育成をどのように実現させていけばよいかという課題である。

目的②：目標・内容の理論構築

第2章で導いた課題の1点目、すなわち国語科論理的思考力育成における目標・内容のあり方については、第3章で明らかにされた。そこではまず、内容としてのさまざまな概念・知識があり、その概念・知識をどのような状態で学ぶべきかというレベルとして目標があるという前提が示された。そ

して、内容としては、第1章で提案した観点であるPLTに基づいて内容の大枠（表1）を提案し、この枠内の概念を内容にすべきだと論じた。さらに目標としては、知識の種類や国語科三領域との関わりにおいて内容がどのような状態として学習者に学ばれるべきかを明らかにした。

<p>I 言語・物事の関係</p> <p>I-1 言語間の関係</p> <p>ア 関係の種類は何か</p> <p>単一関係：対比系／順序系／因果系／具体—抽象系</p> <p>複合関係</p> <p>レトリック・文法関係</p> <p>イ 言語化されている度合いはどうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・接続詞などの言語によって関係が明示的に示されるか ・関係の構成要素が暗黙化されるか <p>I-2 言語と世界＝物事との関係</p>
<p>II 人の頭の中で起こる思考</p> <p>ア 思考の種類は何か</p> <p>単一思考：対比系／順序系／因果系／具体—抽象系</p> <p>複合思考</p> <p>レトリック・文法思考</p> <p>イ 言語表現に至る思考過程なのか、言語表現に結果として表れた思考結果なのか</p>

表1 国語科論理的思考力育成の内容の大枠

目的③：方法の理論構築

第2章で導いた課題の2点目、学習者の思考過程に着目した国語科論理的思考力育成については、第4～7章で論じられた。なお、ここ以降の論は、説明的文章の読みに領域を絞ってなされた。

第4章では、認知心理学・国語科教育学における先行研究を分析しながら、学習者が説明的文章を読むこととはどういうことなのかという実態と発達、そしてそのような学習者にどのような指導をすることが望ましいのかが論じられた。学習者の論理的思考の学びが「先送り専有」「思い込み専有」などの妥当とはいえない「専有」を伴う複雑な過程であることを踏まえ、国語科論理的思考力育成において、学習者個々の論理的思考の過程に着目した指導を行わねばならないという原理が導かれた。

続く第5・6章では、学習者の思考過程に着目した論理的思考力育成指導を構想するための具体的・実践的な知見を得るために、個別指導場面と一斉指導場面のそれぞれにおける先駆的な実践が検討された。

第5章では、市川編（1993）による認知カウンセリングを具体的な手法として、小・中学生に説明的文章の読みの指導を行った。それにより、認知カウンセリングが説明的文章の読みを領域とした国語科論理的思考力育成方法として有効であることが実証的に明らかにされた。

第6章では、児童言語研究会による一読総合法、板倉聖宣による仮説実験授業、そして、Palincsar & Brownによる相互教授法を検討した。それによって、一斉指導の中で学習者の論理的思考の過程を把握し、そこに介入していく具体的な手立てが明らかになった。例えば、学習者に本文中に書きこみを行わせることによる思考過程の把握や、学習者間で思考過程に対する把握・介入を行わせることな

どが具体的手立てとして示された。

第 7 章では、第 3～6 章を踏まえ、学習者の思考過程に着目した国語科論理的思考力育成指導の単元・授業を構想する際の原理が明らかにされた。すなわち、目標・内容を定めた後、教示段階→把握・介入段階→振り返り段階という流れで単元・授業を構想することを提案した。また、把握・介入段階において学習者間の関わり合いを行う場合、手引きを作成するなどして、学習者を指導者として機能させていく手立ても論じられた。それらを踏まえ、第 7 章の最後には小学生を対象とした指導の具体的な実践案を示し、理論の具体化を図った。

目的④：実践的研究による理論のブラッシュアップ

そして、第 8・9 章では、第 1～7 章までの理論を具体的な授業のレベルで具体化し、小学校における実践的研究を行った。この研究は、ただ理論を具体化するだけではなく、理論で説明のつかない実践の現象を汲み上げ、その現象をもとに理論の修正を行うというデザインベース研究を手法としたものであった。具体的には、第 9 章で実践 1 が行われ、実践 1 の成果・課題を踏まえて理論修正を行った。そして第 10 章で、修正された理論をもとに実践 2 を行い、実践 2 の成果・課題を踏まえて再び理論の修正を行った。実践 1・2 を通して、第 7 章で構築した理論は、より多くの学びを引き起こすものとしてブラッシュアップされた。目標・内容については、マクロ・ミクロの論理という視点が新たに受け入れられた。また、指導の大まかな流れについても多くの修正が加えられ、最終的には次ページ図 1 のような指導のあり方が提案された。

■残された課題■

一方、本研究では論じきれなかった課題もある。その課題について、今後行うべき研究の展望も交えながら述べる。

課題 1：構築した理論のさらなるブラッシュアップ

1 つ目の課題は、構築した理論をもとにした実践をさらに行い、理論のブラッシュアップを継続することである。本研究が手法として用いたデザインベース研究は、終わりのない実践の営みである。したがって、第 9・10 章で行った実践とそれに基づく理論修正で本研究の理論が完成したわけではない。第 10 章で行った理論修正をもとに再び実践を行い、そこで理論では説明できない現象を掘いだし、さらに理論を修正し…というサイクルを続けなければならない。今後もデザインベース研究を継続し、本研究で構築した理論をより精緻に、より多くの学習者に学びを起すものにしていく。

課題 2：読むこと以外の領域における論理的思考力育成

本研究では、第 1～3 章は国語科三領域全てを射程に入れたものであったが、第 4 章以降は説明的文章の読みに論を絞って論じられた。そのため、説明的文章以外のテキストを読むことや、話すこと・聞くこと、書くことの領域においてどのように論理的思考力育成を行うべきかという具体が論じられていない。これらの領域も視野に入れた論を構築し、その論をまたデザインベース研究で意義あるものにしていくという研究が必要である。

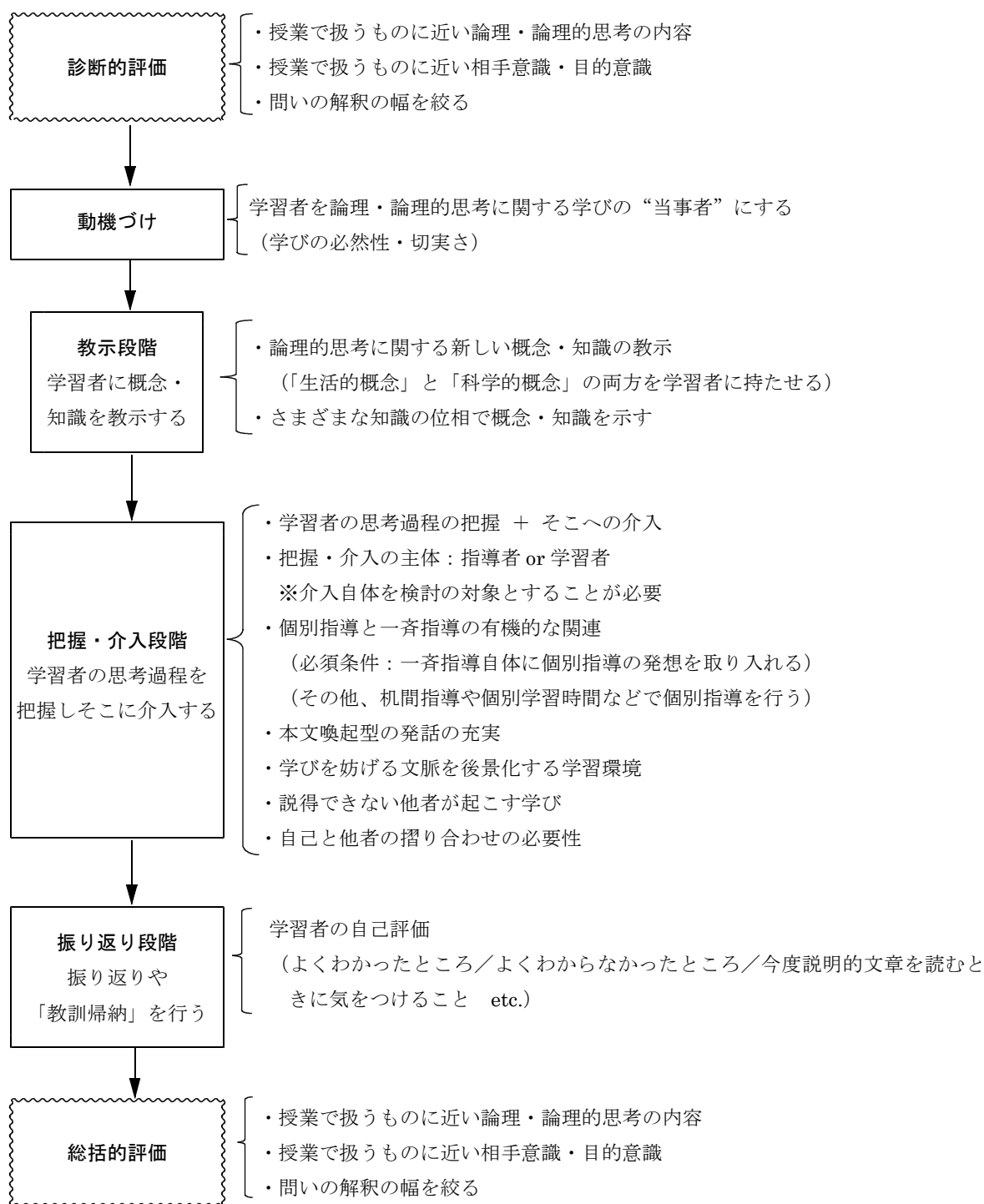


図1 学習者の思考過程に着目した国語科論理的思考力育成指導の大枠 (説明的文章の読みにおける技能目標の達成の場合)

課題 3：他の学校段階・学年段階における論理的思考力育成

第 9・10 章で行われた 2 つの実践は、小学 6 年生を対象としたものであった。そのため、小学校低・中学年段階や、中・高等学校段階における論理的思考力育成の具体的な姿を示すことができなかった。しかし、本研究が第 10 章にわたって構築してきた理論は、小学校 6 年生段階以外の学校段階・学年段階の実践を構想する際にも十分援用しうるものだと考えている。本研究の理論をもとに、小学校 6 年生段階以外の学校段階・学年段階における実践を構想し、理論の有効性を確かめることが必要である。ただしその場合にも、実践からの理論修正というデザインベース研究の手法を採り、常に理論の可変性を意識する。

課題 4：論理的思考力育成のカリキュラム

課題 3 とも関わるが、今後は小・中・高等学校段階を通した視点で、より多くの学習者に系統的な論理的思考力育成指導を行うために、各学年段階に応じたカリキュラム論を構築する必要がある。今後の予定としては、まず、学習者の論理的思考の過程の実態について小学校・中学校・高校を通した調査を行い、量的に信頼性のあるデータをとる。次に、その量的なデータをもとに、どのような系統性で論理的思考力育成を行っていけばよいのか、カリキュラムを開発する。このように実証的なデータからカリキュラム理論を構築することで、もちろんカリキュラム理論自体が修正の余地を持ちながらも、より信頼性のあるカリキュラムが構築されると考えられる。